研究ノート

同一性（アイデンティティ）に関する諸問題——その一

帆足喜与子

はじめに

アイデンティティ（Identity）という語が，人間に関して日常使われるばあい，人の身分，職業がはっきりしていて，その人がどういう人であるかの理解が，自分と他人で概ね一致しているような時，その人のアイデンティティが成立するというように用いられる。

いかにも簡単明瞭なことのようであるが，実は，各人がアイデンティティを獲得するに至る発達心理的過程は決して簡単ではない。人間生誕以来の課題である。

子どもから青年になり，おとなになってアイデンティティをうちたてることができる人は大多数であるが，そのうちたて方の質は千差万別で，確実な人もいれば曲りなりにようやくという人もいるだろう。これは身分，職業の貴賤の問題でなく，いかにその人が社会に取り組んでいるかの質の問題であり，個人の心の問題である。

アイデンティティを確立してそこねた人もある。いわゆる精神的に障害のある人は，その戦に敗れた人である。社会の中に身分を打ちたて位置を占めることはとってつけたようにしてできることではなく，人間の適応の努力の末に自

我の確立と表裏をなして遂げられることである。

精神は正常であっても，亡命とか移住などのために，適応に特有の困難や悩みを経験することがある。また，すべての人が，児童期を経てのち，青年期に至り，それから成人になるあいだに，アイデンティティの混乱を経験する。自分の個性にふさわしい道がみつかるか，みつからないかの動揺は，危機的様相を呈し，実際にこの時点で，自殺したり病気になったりして敗北してしまう人間もいるわけである。

青年期におこる身体的成熟に由来する様々な内的動揺は通例のものであるがそれに加えて，現代は青年が親や年長者から指示された道に従うことがすくなくなって，一見多大の自由や可能性が彼らの目の前に開けたようであるが，可能性が多様になっただけ，むしろとりとめなく拡散するおそれも出来，自分の行き方の選択に決断をはたらかすことがむずかしくなった。こういった状況を青年のアイデンティティにおける危機と呼んで "Identity, youth and crisis"[1]「アイデンティティ—青年と危機」[2] という書物を著わしたのが E. H. Erikson (1902—　) である。

彼の経歴の記述は省くが，彼をしてアイデンティティの問題を取扱わしめるに十分な根拠となる経歴上の事実を2つ挙げよう。それは (1) 彼が精神分析学者として人間の精神発達に関心をもち研究を重ねて来たこと，(2) 彼自身がドイツからアメリカにわたった移住者で，自からのアイデンティティ形成に紆余曲折を経験していること，である。

筆者は精神分析について深く知らないので，エリクソンのアイデンティティに関する一連の書物に難解さを感じながら読んだ。難解さは文章表現の上にもあるしまた論文として秩序に欠けるということにもよるようである。

その理由からか，エリクソン著書の邦訳には当を得ていない訳文が見出される。筆者が本稿に引用する邦訳書からのものも，原文に照らしあわせて疑問と思われるものもあるが，諸種の理由で，疑問をのこしながら，大方邦文訳そのままを借用するつもりである。

1. 自我同一性 (ego identity)

エリクソンは，人間に関する（事物に関するものでない）同一性は次のように説明されるとする。「一つの人格的な同一性 personal identity をもっているという意識的な感情は，……時間的な自分の自己同一 self-sameness の連続性 continuity の知覚と，他者が自己の同一と連続を認知しているという事実の同時的な知覚である」[3]

ところが，自我同一性は，人格的同一性において意味される単なる存在の事実以上のものであるという。すなわち，自我統合力による自己の同一と連続の存在事実だけでなく，同時に統合力が他者に対して自己が持つ意味の同一と連続性を保証するはたらきをしていることの自覚なのである。

子どもが歩きはじめたときは，嬉々として衝動的に歩行運動をくりかえすだけであるが，やがて，彼は「歩けるようになった自分」の支配力を漠然ながら自覚するようになる。ここに彼が成長してのち体験するアイデンティティの発達初期段階の意義が認められる。このように同一性の基本概念には，同一性の証明は，主体的な同一性のはたらきによってのみ果されるとの意味が含まれる。

何故かといえば，自我は生命のない事物の存在と異なり，瞬時たりとも発達を止めることなく，主体的に「変化していく運命に直面しながら，同じもの，および，持続性をもち続ける」[4] 能力をもつものだからである。

しかも，今引用した箇所につづいて，エリクソンは次のようにいっている。「運命は，常に内的状況の変化と結びついている。内的状況の変化は，精神発達の段階および，環境条件や歴史的条件の変化によってひきおこされる。一見不思議にみえるかもしれないが，十分に確立された同一性は，急激な変化にも耐えうる。なぜなら，この十分に確立された同一性は，自分の文化が基礎としている基本的価値を十分にとりいれているからである。」

ここで，アイデンティティの基礎に，自分の所属する文化の価値が登場してくる。この点については，エリクソンの属する精神分析学派の始祖たるフロイ

ト（Freud, Sigmund）が，つねにとりあげている同一化との関係においてあとで考察する。

2. 同一性の体験

アイデンティティは，主体的な体験として扱われることが明らかになったので，ここで，エリクソンが挙げているアイデンティティ体験の実例を紹介して理解を深めることとしよう。

アメリカ・プラグマティズムをひらいたウイリアム・ジェームス（William James）が彼の妻にあてた手紙に次のようなのがある。

「人間の性格というものは，ある精神的，もしくは道徳的な態度の中におかれたときに，はっきりしてくるものです。つまりそのような態度が身に宿るとき，人間は，ものごとに積極的に，しかも生き生きと対処できる自分を，きわめて深く，強く感じるのです。そのような瞬間には，次のように叫ぶ内なる声が聞こえてきます。『これこそが真実のわたしだ！』

「能動的な緊張感，いわば自分自身を支えてくれるような感覚，そして外界の諸事物がそれぞれの役割をはたし，そうすることによって，わたしの営為を十分調和のとれたものにしてくれることへの信頼感，しかもその際にいかなる保証をつけなくともそうなるだろうという信頼感というような要素のことです。だから試みに，それを保証付きにしてみるがよい。……その態度は，わたしにとってただちに生気のない，刺激の乏しいものに凋んでしまうのです。次にその保証を取り除いてみるがよい。すると……ある種の深遠なる熱狂的な歓喜を，またすべてのことを進んで行ない，すべてのことを喜んで耐えようという激しい意欲を感じるのです。……この歓喜や意欲は，言葉では具体的に表現できないようなたんなるムードや感情ではあるけれども，少なくともわたしにとっては，明らかに，すべての実践的理論的決断が下される際の最も深い原理をなしているのです」[5)]

これこそが，真実のわたしだという実感，そして外界の諸事物が処を得て，自分と調和しているとの自信に満ちた安定感が，アイデンティティ体験と呼ぶ

にふさわしいものとして示されているのである。

エリクソンは，アイデンティティの体験が，いかなるものかを直観的に理解させるために，もうひとりの偉大な精神分析家フロイトの文を引用している。

「ユダヤの民の魅力を高めてやまないものが山ほどあります。それは，一つに数多くの何か薄暗い感情の力であります。それは言葉では表現できないものですから，なおさら力強く感じられるわけです。もう一つは，内的アイデンティティに関する明確な意識であります。つまりユダヤ人にのみあてはまる共通の精神構造を含んだ心安らかな私事に関する意識のことです。……わたしの苦難だらけの人生行路にとっては，必要不可欠なものとなっていた以下の二つの特徴は，ひとえにわたしのユダヤ人としての性質に負うものだという自覚が，わたしにはあったのでございます。その二つの特徴とは，第一に，わたしはユダヤ人でありましたために，数多くの偏見から自由であったことであります。他の民族の人々は，まさにそのような偏見のゆえに，知性の働きが限定されていたわけです。第二の特徴とは，わたしはユダヤ人であったため，いつでも野党に組みする用意ができており，『団結固い多数派』と折り合わなくともやってゆける備えができていたことであります」[6]

フロイトのばあいは，みずから文中アイデンティティなる語を用いているがその意味するアイデンティティとは，民族的意味，すなわち民族的同一性の直感というべきものである。「共通の精神構造を含んだ心安らかな私事」は，たんに「精神的」であるばかりでなく，また「私事」ではなく，それを分有しあっている人々だけが理解でき，神秘的な言葉によってのみ表現可能な深い共同体感であるという。

この二人の体験の叙述に用いられている言葉の上から，共通に語られているものを見出すことは，一見むずかしい。しかし，両方ともに，自分の生き方の核心に触れているものであることがわかる。それだけ，アイデンティティ体験というのは，生活体験を包括し，一口にとらえ難いもののようである。

要するに，エリクソンが指し示している自我アイデンティティとは，自我の能動性，自我の強さ，であり，その「自我」は，心理学で従来もっと抽象的に

しか論じられていなかったものと異なり，現実に直面し，立ち向かい，自分がまわりの世界の中に適切にはまりこんで，生きがいを実感する体験，これこそわたしだとする自分の認識の獲得というようなものだと註釈しうるようにおもう。

ジェームスとフロイトの引用に説明を加えたあと，エリクソンは次のようにいっている。

「心理学的用語を用いれば，アイデンティティの形式は，省察と観察の同時的な過程を必要とする。その過程は，あらゆる水準の精神機能におこっているのだが，これによって，個人は他の人たちが彼ら自身とひきくらべ，かつ彼らが認める類型論に照らして自分を判断するであろうとおもわれるやり方で自分を判断することである」[7]

つまり，能動的な自分のはたらきかけを意味するものでありながら，同時的にそれは相手からはたらきかけられ，それに対して自分はこうであると相手の眼からみたようにして納得する自分である筈である。こちらの側だけを云々するのでなく，他に対立し，追いつめられた瞬間に他人の存在と同時的に成り立つ自分の存在を実感することである。

あるアメリカ人が，Aという人に対する自分のアイデンティティと，Bという人に対する自分のアイデンティティとは異なると筆者に語ったが，まさに上述のことを意味しているとおもわれる。

相手と作用しあい，社会の中に位置づけられてはじめて自分が自分になるという考え方は，次のエリクソンの言葉に連関してくる。

アイデンティティは「個人の核心と，それに共同体文化の核心に位置を占める過程である」[8]

以上，アイデンティティとはいかなる意味のものかを，エリクリンに従って至極簡単に説明した。しかし，こういったアイデンティティ体験そのものだけをとり扱っても心理学的に不十分である。

そもそも，アイデンティティとは何を指すかが考察されるのは，人々のア

イデンティティに何らかの問題，故障があったことに由来する。すなわち，まず，アイデンティティの喪失の考察が関心の焦点の第一にあったわけである。ちょうど，精神的健康とは何かが論ぜられるには，精神的不健康の存在が問題を投げかけたからであり，身体の病気，故障に関心が寄せられてのちに，身体的健康が改めて見なおされるという順序を辿るのと同様である。

更に，成人の健全なアイデンティティの形成はいかにして行なわれるか。すなわち，どのような条件で，どのような発達経路を辿って，われわれは社会の中に処を得てはまり込み，自分らしい自分になってゆくかの考察がもう一つの関心の焦点である。

アイデンティティの発達と危機，そして喪失——これが実にエリクソンのアイデンティティ研究の本題なのである。

3. 人生周期 life cycle

エリクソンは，すでに1950年に出版した「幼年期と社会」Childhood and Society[9] に，「人の八段階と称して，生誕以来各発達段階における自我の特質——規準を示している。各段階で，その規準に達していれば，有機体としての個人に予定されている発達が社会機構の中に統合されうるに十分な強さを顕わすことができるというのである。次頁に掲げた図の対角線上にならべられてあるのがそれで，各段階の規準と，それに対応する相対的な，心理的，社会的病態規準である。もちろん正常な発達において，後者が含まれていないというのでなく，前者が後者よりもより価値をもつという意味である。

1959年の Identity and the life cycle[10] には，対角線上の配置に加えて，垂直と水平の欄がうめられている。5の欄（垂直）に書かれているのは，各発達段階特有の規準を獲得するために，何らかの形で事前に存在すべき状態である。またVの欄（水平）は，各発達段階の規準の達成，未達成が，青年期の特性にどのような影響をもたらすかを示している。

更にややくわしく考察しよう。

I．（乳児期）　0才～1才，口と呼吸の感覚段階。この時期は精神と身体が未

	1	2	3	4
I 乳児期	信頼対不信			
II 早期児童期		自律性対恥，疑惑		
III 遊戯期			積極性対罪悪感	
IV 学齢期				生産性対劣等感
V 青年期	時間展望対時間拡散	自己確信対同一性悪感	役割実験対否定的同一性	達成の期待対労働麻痺
VI 初期成人期				
VII 成人期				
VIII 成熟期				

分化なので，口と呼吸の刺戟から受ける感覚的経験は，人間の深層に影響を与える。子どもはただ受ける立場にあるわけだが，適切な刺戟が与えられれば，外界を信頼することを学ぶ。（**信頼対不信**）

II.（早期児童期）　2才～3才，しつけという文化，社会的要請にこたえる時期にあって，たとえば排泄の訓練では，肛門括約筋による保持と排出のいう相反する作用を学ばねばならない。（保持よりも，その逆の放つとか排出の動作の方が子どもにとってむずかしい。）相反する2つの動作の調整が自律性を生み出す。（**自律対羞恥，疑惑**）

III.（遊戯期）　4才～5才，この時期には自由に遊び廻わり，また性的関心や子どもなりの性行為が出現する。男の子は母親に，女の子は父親に性的ニュア

5	6	7	8
一極性 対 早熟な自己分化			
両極性 対 自閉			
遊戯同一化 対 （エディプス） 空想同一性			
労働同一化 対 同一性喪失			
同一性 対 同一性拡散	性的同一性 対 両性的拡散	指導性の分極化 対 権威の拡散	イデオロギーの分極化 対 理想の拡散
連帯 対 社会的孤立	親密さ 対 孤立		
		生殖性 対 自己吸収	
			完全性 対 嫌悪，願望

ンスをもつ愛情を感じ，そのために，男の子は母親の愛の対象である父親に似ようとして父との同一化を試み，女児は同様な意味で母親に同一化する。この時期にはまた両親からの禁止，命令をとおして，子どもの中に超自我が作られる。親への同一化をとおして，子どもの中に自主性ができるか，もしまちがえば，超自我からの圧迫から来る罪悪感にさいなまれる。（**積極性対罪悪感**）

Ⅳ.（学令期）　6才～12才，この時代は，感情的な葛藤から逃れて，外界に目を向け，好奇心を満足させ，知識を得，知的作業をする。物事を作り出すよろこびが獲得される。なおこの時期に，自分の行動に対する他人の評価によって，自己概念が形成される。（**生産性対劣等感**）

Ⅴ.（青年期）　13才～18才，自己概念が形成されて，自我の問題が意識にのぼ

る一方，性的成熟による性衝動の増大のために，内的世界が動乱し，自分について問い正し，自我の目ざめに至る。子どものときから今まで経験してきた多くの同一化経験を，真に自分のものとするために再検討し，再統合がおこなわれる。（**同一性対同一性拡散**）

またVの欄を，対角線の欄と対応させつつ検討すると次のようなことがいえる。自我の発達第1段階の信頼対不信の葛藤が克服されていれば，青年期には時間的見透しが得られる。早期児童期に自律性が獲得されていれば，青年になって自己確立が得られる。児童期で自律性が得られれば，青年期に種々の役割実験を行なうことができる。学令期で生産性を獲得していれば，自分の仕事の達成を期待することができるというふうである。

このようにして，個人としての発達が社会とのからみあいをうまく通過して来た結実と青年期以前の同一化の経験とによって，青年はアイデンティティを獲得し，健全に自己を社会の中に位置づけることができる。

4.　同一化と同一性

「言語的にも，心理学的にも，同一化 identification と同一性 identity は共通の根をもっている」[11)]

子ども時代は，同一化によって社会の仲間入りをした気になっている。おとなのいうことをきかないと愛されないし，おいてきぼりになるから，必死で，おとなが承認することをしなければならない。

こうして，子どもは自分が属する社会の文化を身につけ，同一性の下地をつくってゆく。よいことはよいといった風に割切って実行し，その結果よいことをしたとおもって大いに満足している。しかしあくまでもおとなたちのあとを追っているという感じは否めない。

ひじょうにしばしば，ごっこ遊びやいたずらの中におとなのまねをしている。

また，若者になると，実力も経験も不足なのに背のびして冒険的におとなのまねをしてみたりする。

こういった同一化はいくら積み重ねられても一個のパーソナリティの中に統合されるものではない。これらは，更に新しい同一化によって統合されたとき青年期の発達過程は究極的に完成される。この新しい同一化は切迫した緊張によって，若者たちに選択や決断をよぎなくさせる。

実はこの決断をする前に，青年期という心理的，性的猶予期間をとって，彼らは自由な役割実験をとおして，自分の適所しらべをしていたのである。そして「適所を発見するや，この若いおとなは，子どもとしての自己の存在とこれからなろうとしている存在の橋わたしをし，自分自身についての認識と自分に対する共同体側の是認とを一致させる内的な連続性と社会的同一の感覚を確証する」[12] この時に同一性が成立する。同一性の基礎にその人の住む社会の文化値価が十分にとりいれられてある所以である。

われわれが，自己の同一性を最も強く意識するのは，まさにこれを獲得しようとしている時であり，それを知ることで，ある種の驚きを感じるときである」[13]

もちろんこの同一性は，いっぺん獲得されたらそれでよいというものでなく，たえず失われては再獲得されるとエリクソンはいう。

こうした同一性は，人間の精神発達過程を概念化して人生周期として示されてある中の一概念にすぎない。しかし，同一性が得られなければ社会人としての一生を過ごすことができない。

ここで，筆者が更にエリクソンを通してさぐってみたいことは，子ども時代に経験した数多くの同一化のすべてが，青年期の終りの新しい決断的同一化にとり上げられるものでないらしい点に関連してである。子ども時代に同一化したもので否定されたり，置き去りにされたりするものがあるが，それはどのような類いのものかの問がのこされる。

その二において，その点や，アイデンティティ喪失について究明したいとおもう。

〔註〕

(1) Erik H. Erikson, Identity: youth and crisis, W. W. Norton & Company, Inc., New York, 1968

(2) E. H. エリクソン著　岩瀬庸理訳　アイデンティティ〔青年と危機〕北望社　1969

(3) エリクソン著　小此木啓吾訳編，自我同一性，誠信書房　1973，p. 10

(4) エリクソン著　鑢幹八郎訳　洞察と責任　誠信書房　1971，p. 90

(5) エリクソン著，岩瀬庸理訳　アイデンティティ　pp. 9〜10

(6) Ibid., pp. 11〜12

(7) Erikson, op. cit. p. 22

(8) Ibid.

(9) E. H. Erikson, Childhood and Society, W. W. Norton & Company, Inc., New York, 1950

(10) エリクソン著　小此木啓吾訳編　自我同一性　誠信書房　1973，p. 158

(11) Ibid., p. 147

(12) Ibid., p. 146

(13) Ibid., p. 156